

12

特 244
944

直夫著

米国の参戦と
日米戦争論

世界はど
うなる!!

東京情報社

停
十
銭

2



0010610000

0010610-000

特244-944

米国の参戦と日米戦争論

山川直夫・著

東京情報社

昭和16

ABJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

特24
944



山川直夫著

米國の参戦と
日米戦争論

東京情報社



目次

- 一、松岡外相は語る……………(三)
- 二、ル大統領の爐邊閑談……………(九)
- 三、米國參戰せば……………(一四)
- 四、日本參戰せば……………(二〇)
- 五、日米戦争論……………(二七)
- 六、世界的動亂……………(二九)

米國の參戰と

日米戦争論

山川直夫

一、松岡外相は語る

二千六百一年の春はあけて、世界的大戰の前途は混沌として不安なる一途を辿る。

獨逸の電撃的作戰は、白蘭佛の歐大陸には驚異的效果を挙げたが、英本土上陸戰には世人の豫想通りでないとも云へる。従つて英獨決戰の今後と、これに不可分の米國の對英援助、それに沈黙ソ聯の動向とは來るべき今後の一ヶ年間に如何なる變化を來すかは何人も關心なきを得ない。

松岡外務大臣に就ては、世間的に種々な批評はあるが、吾人の目に映じた所では、とにかく霞ヶ關の形破りの外相であると云ふてよい。

元來霞ヶ關外交官なるものは、その本質に於て、帝大出身であり、御上品であり、定石的であり、外人とも調子よく交際する型の人々である。

類例に引へては、失禮になるが、幣原喜重郎男だとか、有田八郎氏とか、松井慶四郎男などの流れをくむ人々である。

松岡は少くとも之等の人々とは異つてゐる。彼が、高等官三等の書記官級で外務省を去つたのは何故であつたか、その真相は別として、然し世間の目から見れば、

「松岡は、米國オレゴン大學の出身で、帝大出身ではない。それで霞ヶ關型の外交官でなく、帝大閣の威張る外務省にゐるのが厭で去つたのであらう」

こう云ふ感想もある。

又、彼は外務省を辭する時に、

「こんど外務省に来る時は大臣として来る」

と壯言したそうだが、何か不不満々で外務省を去る彼の腹癒せの言葉とも見られるが、こんなことは言へかねない人物である。

今や、その言葉と因果關係のあるなしに拘らず、未曾有の難局にある外務に大臣として立つて到つたのは、一つの感慨である。

それから序でもう少し附加して置きたいのは、彼が就任すると間もなく、外交官の大異動を行ひ四十有餘名の大公使以下を更迭したことは、如何にも型破りで、幣原とか有田とか云ふ外相では一寸學問關係計りでなく出来まい。

其上、新しく採用した人物も異色あるものを見る。例へば、政黨政治家として相當な堀切善兵衛を駐伊大使へ、陸軍中將建川美次をソ聯へ、ルーズヴェルト大統領と「君僕」の間柄で廿五年來の友人だと云ふ野村吉三郎大將を駐米大使へ、又、十五年も外交官から去つて、然かも勅選議員にもならず、諺々の外交論で有名な明治外交界の本多熊太郎を駐支大使に任命したことなどは

是非善悪は別として、此の戦時外交時代として面白い人事である。

話は大部岐路に入つたか、とにかく松岡外相は、こうして、三國條約を結び、外交陣容、外交人員を移動して、一意戦時外交に進進しつゝあるのは、多としてよい。

彼、松岡は、屢々、記者團との會見に於て、又は、聲明の形式で、世界的の波動を起す位の意見を發表してゐる。

最近、新年勿々に彼は、海外同胞へ呼びかけたが、祖國日本の進路と皇國の理想とは、彼一流の世界觀があり、哲學があり、本質論があつて一讀の價值あるものであつた。即ち。

「先づその前提として世界人類は如何なる状態にあるかそれから考へてみよう、春を迎へつつ誠に不吉な言をなすやうであるが、そしてそれは最も私の好まざる所であるが、今年はどうかすると全人類にとつて或は最も悲惨にして不幸な年になるのではないかといふことを臆かに懼れざるを得ないのである。過去五十年間に人類は實に長足の進歩を遂げ偉大な發明をしたが、その發明になる最も勝れた武器を取つて最も恐るべき強烈な戦争が行はれてゐる、この上更に人智の限り

を盡した新鋭なる武器をも使用するに至らば、或は現代文明は遂に没落するのではなからうか、かういふ意を抱かざるを得ないのである。而もその時期は刻々に迫つてゐる。

私は唯世界の有識者が眞に天を畏れる敬虔な心持を以てこの危機を切り抜けるやうに協力せんことを心から冀ふ、この年をして現代文明没落の第一年とすることなく反對に世界を通じて公正にして恒久なる眞の平和の基礎を力強く建設し眞の世界新秩序建設に蘇る第一年たらしめるやう熱望する、之は獨り私の念願のみではない、實に我が大和民族の衷心よりの念願である、諸君の祖國日本が行かんとする道は何であるか、皇國の理想は何處にあるかといへば世界人類の功利的な考へ方を清算し舊秩序を匡正し總ての國民乃至民族をして各々その處を得しめ自らその運命を開拓し決定しつゝ各々のその特質を十二分に發揮し、相互に長短相捕ひ相互に有益有利なる共存共榮の國際的共同生活を營み得る様な新しい世界を建設しようといふのが日本の目的なのである、我が榮國の理想である八紘一字は正しくこの世界新秩序の建設を究極の目的としてゐるのである。これは實に大和民族の理想たるべきではない。實に全人類の理想でなければならぬ、過般締

結された日獨伊同盟條約も實に大和民族の奉じ來つたところの傳統的大精神である。先づこれを大東亞圈内において實現し諸民族諸國民をして各々その所を得しむる新秩序を作りたいと云ふのが我が大和民族の念願であつて、大東亞圈内に在る諸民族にこの精神と理念を諒解して貰つて協力して頂き度いのである、無論かかる大事業は我々一代で出来るものではない、孫子の時代にその完成を求めなければならぬ、努めて掩まざれば長くとも五十年後には世界が我が民族の言明せる理想の決して虚言でないことを認むるに至るであらう。八紘一宇は念佛ではない、日獨伊三國同盟といふ最重大なる國際條約の前文にもこれを明記してあり、將來皇國日本の外交はこの大理想を基として行はるるものであることを全人類に向つてハッキリさせた。

海外に在留せらるる同胞諸君に於ても何卒諸君の祖國のこの傳統的精神である人類大同の大理想を固く把握しつつその居らるる各國民と相和し又國民の一部となられた諸君はその國に忠誠を旨としつつ、しかも祖國の大理想に協力あらんことを希望する」

此の話に依ると、この一九四一年の世界外交界は、非常なる危機にあるのである。「今年ほど

うかすると全人類にとつて或は最も悲惨にして不幸な年になるのではないかといふことを秘かに懼れざるを得ないのである」と語つたのは、その一である。然かも、松岡は、共存共榮の世界的平和を望んでゐるのは、彼の一特色である。

野村大將を米國に送り、建川中將をソ聯に送つた彼が、帝国外交の平和的工作に遺憾なからんことを望む。

二、ル大統領の爐邊閑談

松岡外相は、一意世界平和建設に努めつつあるのに、これと對應的に物議の種となるのは、ル大統領の談話である。昨年十二月二十九日ホワイト・ハウスから放送された爐邊閑談、一月六日米國議會で發表した教書の如き皆、この險惡な國際狀勢に拍車をかけるものである。

先の爐邊閑談にせよ、後の議會教書にせよ、何れも、英國の勝利の爲めに援助を惜まぬことを語つたもので、著しく反樞軸國的である。今ここに、この二つを論議する必要もないから、その

一つであり代表的な「爐邊閑談」を通じて、米國大統領及び米國民の意志の何處にあるかを窺ふことにする。

「爐邊閑談」は既に發表されたことであるが、要點を再録すれば、

「若し今回の戦争でイギリスが敗北すればわがアメリカはナチス・ドイツの大砲の前に憐愍を乞はなければならぬことにならう、それ故にアメリカはその力の許す限り一トンはおろか一オンスの彈藥でも軍需品でも惜しまずにイギリスに與へるであらう、イギリスは必ずやこの戦争に勝利を占めるものと信ずる日獨伊三國軍事同盟はアメリカに對する脅威であり最後通牒的行爲と認めねばならぬ。ヒトラー氏は全世界のすべての國家を屈伏せしめ得るかも知れぬがアメリカ一國だけは斷じて彼の前に膝を屈するものではない、予は獨伊樞軸側は今次の戦争において到底勝てぬであらうと確信する、予のかかる確信は最も新しい最も信頼し得る諸情報に基礎を置くものである、今回の戦争においては妥協的の和平に達する見込みはないと見なければならぬ、元來一方的に強要されて無理矢理に結ばれた和平といふものは最も大規模なる軍備競争と人類史上長大の破

壞的貿易戰の禍根を他日に残す第二のヴェルサイユ體制をつくることにはかならぬものである。アメリカの對英援助計畫が可成りの危険性を孕むものであることは否定出来ないが、從來屢々國民に公約したアメリカ不參戰の誓約を裏切ることなくこれを遂行し得る自信は十分にある、アメリカ自國の軍隊は斷じて海外に派遣するやうなことはしない、驅逐艦の對英護渡はわが老朽驅逐艦その他の軍艦並びに船舶をアメリカの必要とする新造艦船と代換せしむるため單なる工業生産品としてイギリスに交付するに過ぎぬものであり従つて議會の諮問を経ることなしにイギリスへ供與されよう、また所謂「新秩序」なるものはアメリカにとつてもヨーロッパにとつても、またアジアにとつても相容れないものであり地球上の人類を支配せんとする暴力と誘惑との汚はしき同盟である、アメリカ諸港に繫船中の獨、伊、デンマーク等諸交戰國の船舶をアメリカ政府の手で徵發することは三國同盟規約の發動を促す點火劑に他ならぬと獨伊各紙は書き立ててゐるが、イギリスを援助せんとするわれ／＼の決意は終始一貫かはらない。いかなる獨裁者と雖も亦いかなる獨裁者の聯合勢力を以てするとも我が對英援助の決意を脅迫によつて滅殺し得るものではない

い、又この牢固たる決意を獨伊側が何と解釋してわれわれを脅迫しようとも敢て意に介するものではない」

と云ふのである。

一體「爐邊閑談」と云ふものであれば、寒い冬に暖かな火の邊で、親しい友人や家族と、むだ話し、又は世間話をすると云ふ意味に、我々日本人は取る。

ル大統領は、どんな考で云ふたがわからないが、先年も、この「閑談」が相當世界的反響を起したが、今度の「閑談」は、センチションを捲き起した點では、重大聲明にも優るものである。殊に、その云ふ所の大膽と云ふか、將又、放言とも云ひたい世界政策と歐洲大戰對策が、まさしくと表現されたのには、永田秀次郎氏でなくとも驚かざるを得ない。

現在、歐洲の戦局は、大體獨逸側に有利にあることは人の認むる所である。尤も、英國が北海で、地中海で頑強に反抗してゐることは事實で、英本土上陸戦も、噂の様にはかどらず、イギリス制海權の強力を物語つて、獨逸の英征服に一沫の雲翳を認めることはあるが、英國の勝利を公

言し、米國が一トンはおるか一オンスの彈藥でも軍需品でも惜しまず英國に與へると言ふのではその言のあまりに露骨であり、大膽であるのに、開いた口が塞がらぬ形である。

一體、世界の警視總監になつたとか云はれるル大統領は、如何に三選して、多少逆上したとしても、彼の位置で、よくもかく放言が出来たものである、米國の一無資の勞働者がウキスキーをあふり飲み乍ら、それこそ文字通りに「爐邊閑談」で、心置きない二、三の友人と、その場限りの放談であれば、どんなことを言ふと、大した問題にはならぬ。

然し、一國の元首とも云ふべき大統領がこんな大膽なことを語るのは、驚異である。其の上、どんな根據と情報に依るのか、吾人の不思議とする所である。

然し、今、獨伊が勝つ、英國が勝つと、議論しても詮方なく、暫く戦争の成行を見る外ないが、總のよいのは、米國は

「從來屢々國民に公約したアメリカ不參戰の誓約を裏切ることなく、これを遂行し得る自信は十分にある。アメリカは自國の軍隊を斷じて海外に派遣するやうなことはしない」

と云ふのである。

このことは、去年の十一月、米大統領選挙の折に、ルーズヴェルトもウキルキーも共に唱へたことであるから、ル氏としては當然のことだが、この「爐邊閑談」の様に、好く行くとせば、英米アングロ・サクソンの世界支配は、今後も續く譯けである。そして、それが世界人類の平和と幸福とに貢献するか、せぬかば改めて吟味する外ない。

而して、米國の現状は、日に／＼に對英援助を増加し、參戰への危道を辿ると見做される様になつた。

三、米國參戰せば

尤も、米國が參戰するかせぬかは、未だ判明せぬ、大統領初め國民は參戰せぬ範圍内で、強度の英國援助と云ふのが主張である。然し、米國はそうでも、その援英、援蔣行爲がある限界に達すると、沸騰點に達して、樞軸國側で指を叩へて居る譯に行かず、戰爭の危険が起るのである。

米國言論界の某巨頭は、

一、參戰の可能性 實質的にはルーズヴェルト大統領の肚は決つてゐる。ルーズヴェルト大統領が考へてゐる筋書は近き將來において英國に必需品を運ぶ貨物船の護衛に米軍艦を提供し、ついで英國に貸與する大型爆撃機、戦闘機その他の飛行機に米國の飛行士をつけて英國に送り來年の半ば過ぎには強力な陸軍の遠征部隊を派遣する段取りとなつてゐる、要は英國が果してここ半年持ち耐へ得るかだ、今春のドイツ攻撃を首尾よく撃退し得れば五、六月には軍艦を護送船隊用に提供する肚らしい。これを要するにル大統領はヒットラー總統およびナチスを徹底的にやりこめなくては蟲が牧まらないといふのだ。

これについて注目すべきは國民多數の輿論が舊臘廿九日のル大統領の爐邊談話放送以來「參戰止むを得ず」といふ方向に傾いたことだ、しかもその氣持は徴兵適齡者の間に特に濃厚である、米國が未だ軍事的に準備ができてゐないではないかと人はいふが、それならば世界を見渡したところどこの國が満足の準備をしてゐるかといつた論法である、それにしてもル大統領は米國自ら

が率先して對獨宣戦をする意思はないやうだ、ル大統領に全然好意を持たない某方面の意見でも「参戦氣構へで國防計畫の促進をはかるためには大統領にはゆる獨裁權を興へるのも止むを得ないであらう、今日の國際情勢ではそれを阻止することは殆ど不可能である、ある國が一種の希望的觀測をもつて米國が参戦回避の方針を嚴守するものと觀測してゐたらそれは大きな間違ひだわれ／＼は時と場合によつてこれまでも相當露骨に親日論を主張して來たが、今となつてさういふ態度を示すならば身邊に危險さへある、聯邦調査局の活動は物凄、米國に幾萬と在住するイクリア人、ドイツ人が鳴りを鎮めてゐるのもこれがためだ」と語つてゐる。

二、日米關係 陸海軍部内、殊に少壯幹部の間ではもし日本と戦争するならば今が絶好の時機だと考へてゐる、これは恐るべき事實だ、日本と事を構へなければならぬ理由は全然認められぬ、冷靜に太平洋並に極東問題を考へる識者はさう思つてゐる。政府首腦部の間では日本が野村大將をはじめ米國を理解し米國との親善關係を希望してゐる人物を送らんとする志を十分買つてをり、日米國交調整の門戸を封鎖してゐるものではない、根本問題は日本が支那、滿洲において

米國の權益を認め自由競争による通商の機會を單に口約のみでなく具體的に與へてくれるかどうかにあるといつてゐる、彼らに従へば日本が東亞において經濟的勢力を擴大して行かうといふことは米國が西半球でやつてゐることと擇ぶところはないといふのだ、ここに日米國交調整の餘地が残されてゐる。

以上の二項目にわたる某巨頭の回答から察するに、米國はもし英國がここ五、六ヶ月の間に征服されなければ（米國では政府當局も専門家も、ドイツは半年以内に英本土を征服し得ないと確信してゐる）宣戦ぬきに米國が英國、ギリシヤ側に参戦する可能性が明かにかゞはれる、好むと好まざるとにかかはらず、日本はかかる事態を眞剣に考慮に入れて方針を決定してゆかねばならぬ。

と云ふ議論である。これに依れば、米國が今後半歳の間、獨逸の攻撃に堪えるならば、米國は「宣戦」抜きで参戦するであらう。又、軍部の少壯派には對日戰を論議されて、これが危険であると、米國の参戦に迫る道を語つたが、愈々、米國の参戦が問題となつて來た。

然し、米國參戰を論議するに當つて、獨伊の米國參戰に對する態度如何と云ふことを少しく觀察する。獨伊の首腦部はどんな考であるかは推斷の限りでないが、獨伊と雖も、無限の資源と、二百萬噸の大海軍を有する米國を敵とすることは、對英決戦の多難な今、決して望む所であるまい。その爲めか否かは別として、米大統領の無遠慮な談話に反して獨伊の巨頭は、米國を刺戟するごとき言動はあまり見ない。だが、米國が愈々參戰となつたならば、どうなるか、これは獨伊に對して一打撃であるのは勿論、三國條約に依つて日本の參戰を誘起し、引ひては日米戦争を起すことになる。かくて、第二次歐洲大戰は、愈々世界戦化し、大西、太平兩洋の波は益々高くなり、戦の終局は愈々解らなく、長期戦の豫想を深くするのみである。

第一次歐洲戦に米國が參戰したが、この時は、獨塊の中央同盟國に對して、英佛露日伊其他世界の各國は殆んど全部對獨宣戦を行ふて、獨逸の勝算は、全くない時であつた。それで、安全に貳百萬人の陸兵を佛大陸に送ることが出来たし、軍需品も輸送するに不便はない。——多少潛航艇の襲撃はあつたが——間もなく、巴里講和會議となつて米國が各國をリードし、時の米大統領

ウィルソン氏は、講和會議を指導した。こんな譯けで極めて容易に參戰の目的を達した。

然るに今度の參戰はどうかと云ふと、第一次大戰とは雲泥の差である。獨伊は歐大陸を大部分征服してゐるのみでなく、ソ聯の中立、極東に於ける日本と獨伊の同盟あり、米國は二百萬噸の海軍を太平、大西の兩洋に分割することにせねばならぬ。飛行機の發達と獨伊の潛航艇とは、米國軍隊及軍需品の英國へ輸送されるのを阻止すること大なるべく、大西洋の運輸交通は絶大な不安を受け、その交通の杜絶せぬ迄も、第一次大戰の比でないこと丈けは言ひ得る。

米國の參戰で、英國本土の獨軍襲撃、上陸占領の危機を救ふたとしても、歐大陸に兵を出して佛白蘭等、獨逸の征服地方を回復する如きは、一寸望まれない。其他、ソ聯の動向、バルカン諸國の向背はあつても、米國の參戰が速に英國を決定的勝利に導くとは云へない。

寧ろ、徒らに戦局を混乱に導き、人類の不幸に油を注ぐものと見なければならぬ。況んや太平洋上に二大海軍力の對立抗争となつては、戦局の紛糾思ひやらるゝのである。

四、日本參戰せば

日本は獨伊と共に、三國條約を締結した。然し、これは、英國に對して戰を宣する爲めでもなく、米國に抗爭する爲めでない。寧ろ、歐洲大戰の世界化を防止するものと見ることが出来る。殊に、日本としては、現在、東亞新秩序建設の爲めに、老大な支那の領土で蔣政權と戰闘を交へつゝあるので、他を顧みるのを好まない。

こんな譯けで、松岡外相の談話にもある通り、戰爭波及を防ぐ爲めの條約と云へるのである。

然し、米國が一旦歐洲大戰に参加したならば、當然日本も參戰するに到るのでないかと思はれる。昨年、松岡外相の外交談が行はれた折に、

「三國條約は、米國が歐洲戰爭に参加したからとて、直ちに日本が參戰すると約したものでないと解釋すべきである」と云ふ様なことが、米國の新聞で傳へられたとか云ふが、そんな條文の解釋は別として、又、米國參戰の折に日獨伊三國間にどんな話合が出来、對策が出来るかとは別とし

て、大體三國條約の性質から見て、米國が大戰に参加すれば、日本も、獨伊側に參戰するの止むないことになると思ふのが普通であらう。而して、日本が參戰すれば、太平洋上に波の高く、世界第一流の二大海軍國が、茫漠たる太平洋上に眩々相摩すことはなくとも、雲煙の間に對立することとなり、如何なる風雲と怒濤を捲き起すか解らない情態を現すことにならう。此時に、日米が、南洋政策として、又、對ソ政策として如何なる方針を取るかは、一問題となる。

それに愈々日本が參戰するとなれば、對英政策、殊に、英國の東亞に於ける領土的經濟的、政治的勢力に如何なる態度を取るかは、離るべからざるの問題であるが、茲には、あまりに深く論議は出来ない。只、日米の大戰参加で、歐洲大戰は世界戰となり、混亂の一路を辿る。

五、日米戰爭論

米國の參戰、序で日本の參戰があれば、太平洋上に日米海軍の對立抗爭戰闘と云ふことが豫想される。徳富蘇峰は、「太平洋の波高し」とて、

我等は決して「狼來れり」と大呼するものではない。けれども本年度の皇國は、決して昨年度の新年同様と心得て、安心す可きものではない。「太平洋の波は、實に高し」。我が國民にして、この波濤の響に目を醒さぬものあらば、それは全く全弊であらう。「兩耳如響口如啞。等閑觸著火星飛」と。苟も我に觸着するものあらば、火星を飛ばすだけの覺悟が大切だ。

我等は決して研究に反對せず。討論に反對せず。けれどもそれは時と場合による。今日は既に火が隣家まで燃え移らんとしてゐる。斯る場合には消防學の講習よりも、席一枚でも、バケツ一杯の水でも、銘々持ち寄ることが必要だ。伊藤公は、世間には寧ろ分別過ぎる政治家として聞えてゐる。然も公は曾て曰く、「理を窮るは、平生に在り、事に當りては、明斷を要す」と流石に一代の經世家だけの識量があつたと、今更らながら感心する。今は明斷の場合だ。

我等は決して一切の高論、卓説を葬り去らんとするものではない。けれども高論、卓説も時と場合による。今日は決して議論して日を暮らす時節ではない。正さに我が國難に向つて、我等一體の忠義なる國民は、腹帯を締め直すべき刹那である。世の中には、隣家の火事を見物中に、我

が脚元に火が著くを打忘るゝ盆槍漢もある。我等は決してさる盆槍漢を眞似る可きではない。

萬機公論に決すとは、只だ空論で其日を暮らすと云ふ譯ではない。國民の志望に従ふて、國家の向ふ所を定め、國民の輿論に應じて、國家の力を動かすと云ふことだ、我等は公議輿論の美名の下に、佛國や、英國が、年から年、日から日、只だ蟬噪蛙鳴の爲めに、遂ひに國家の大事を誤りたる、實物教訓に接して、深く自から反省せねばならぬ。

議論は他日の事。今日は實行だ。然し若しこの實行の好機を失せば、百年は愚ろか、千載の悔を招くも、最早及び難けむ。機や、機や、機は眼前に在り」と記して、大膽なる所見を述べた。

吾人は、太平洋上の波の高低に拘らず、大戰参加に伴ふ必然性として、日米戦論の一節を記入するの止むなきを認む。爾來、日米戦争論は、一昔も二昔も前に、陸軍中將佐藤鋼次郎氏に依つて論述されてから、各方面から、或は海外人に依り、或は國內人に依りて論述され、多く議論の餘地もない位である。

今、國民は殆んど何人も、日米戦争に於ては、海上に海軍で行はれること、現在の日米海軍力では、米國も日本を極東に渡洋攻撃して、日本海軍を破るの力なく、日本元より西太平洋の安康を主するが故に、遠く太平洋の彼岸に遠征するの考も、又、その準備もあるまい。相共に他を攻撃する力はない。と云ふことが常識的になつてゐる。然らば如何なる日米戦争が、太平洋上で行はれるかと云ふと、素人には解らないが、對立のまゝに、奇襲戦が行はれ、その間に波瀾が起るのでないかとも豫想される。だが、これ等の事を一々豫想して見るのもどうかと考へるから、戰略家である豫備海軍中將濱田吉治郎氏の日米戦争に關する所説を掲げれば、

「要するに飛行機といふ新兵器出現の結果海戦術は革命的變化を來してゐる。陸上基地が海戦の決戦に参加し得るので陸地の海に對する反作用を甚しく増大した。敵また能くこれを知るが故に輕々しく主力艦隊が沿岸島嶼附近に遊弋はしない。これに加ふるに第二の革命的新兵器潜水艦の出現がまた海戦術に大變革を來した。従つて太平洋における海戦は主力艦隊の決戦は容易に實現せず、極めて長期に亘るゲリラ戦、通商破壊戦根據地争奪戦、要地爆撃戦といふ形を現出する可

能性が多い。來るべき太平洋戦は極度に長期にわたり武力戦よりも經濟戦の長期苦痛を國民は甘受するの覺悟がなくてはならぬ。米國は日本の經濟力を弱しと見てゐるのであるから、決戦を避けて長期封鎖戦に出ることは間違ひない。

以上述べたやうに米國が大西洋の恩恵によつて劣勢軍備に拘らず歐洲強國の北米洲における野心を排撃したこと、太平洋は天の國境なること、我海軍力劣勢なるもこれは軍艦のトン數の比較であつて、空軍の威力は計劃外なること、その空軍の威力は航空母艦のトン數や飛行機數の多寡では優劣は決められない。豫想戰場における陸上基地の存否が重要な要素であること、しかし彼は極東に遠征し戦ひは極東にありと待つものなること等、畢竟われに地の利あるをもつて讀者讀君は能く寡をもつて衆に當り得るの確信を感じられたことと思ふ。

しかしこゝにわれに不利なるものがあることも自覺せねばならぬ。それは天の時だ。天の時は必ずしも我に有利とは申されない。我は支那事變を既に三年半も戦つて國力は若干消耗してゐる英米や蔣政府の考へは日本は既に國力疲弊してゐるから、も少し事變を引つ張つてをれば日本は

自ら経済的に崩壊すると、かう観測してゐる。だから今のまゝでは蒋介石は決して我に降参することはない。英米また授蔣行爲を決して止めはしない。このことは吾人十分覺悟してをらねばならぬ。二千年前に兵聖孫子は「戦争といふものは物入りが大きいからたとひ勝つても長期にわたると士氣は挫け、物資は不足し、財政は苦しくなる。即ち諸侯その弊に發して起る、智將ありと雖ひその後を善くする能はず」と警告してゐる。今米國はこの孫子の警告通り我を疲弊せりと観測しこれに乗じて起つてゐるのであるから、その時は我に有利なりとは申されない。ソ聯亦虎視眈々たるものがある。何時我弊に乗じて起つのか分らない。起たないまでも外交掛引において我をナメてゐるは周知の事實だ。恰も八十年前の米國の内亂南北戦争の時英國は南軍を経済的に援助し、ナポレオン三世はメキシコに己の帝國を樹立し佛國軍隊を派遣した時における米國の國難に彷彿たるものがある。今我國は東亞の内亂に國力を消耗しつゝある。支那事變は今では日支戦争ではない。吾々の内輪喧嘩である。日支國民共にその苦痛を受けつゝある。この内亂未だ納まらざるに歐米の強國が反軍を援助し事變を長期化せしめつゝある。我國の發展を極力阻止せんと

してゐるのであるからたとひ地の利我にありと雖も、これで相殺の形である。この不利を我に有利に持つて行くには人の和が第一だ。それ天の時は地の利に若かず、地の利は人の和に若かずで人の和と地の利我にあれば天の時の不利は克服出来る筈である。

今日日本の直面せる國難克服には何をにおいても人の和即ち一億一心になることである。近衛首相のいはるゝやうに一億國民が火の玉になつて國難に赴かねばならぬ。それが出来ないとあればこの國難は到底乗り切り得ないと思ふ。得ないとすれば、七年も戦つて武勇傳を残してつひに大陸から全部引き揚げたあの朝鮮征伐と同様の結末になるだらう。五十年逆もどりとなり、それから猛烈な臥薪嘗膽三十年の歴史が始まることになるだらうと思ふ。左様なことは斷じて承服出来ない。今直に臥薪嘗膽以上の困苦缺乏を甘受しよう、概ね五年間の辛抱で解決のつくものと余は見透してゐる。石にかじりついてもカユをススつても克服しなければならぬ國難である。その代り一度これを克服したならば、平常の時代では優に五十年掛かる筈と思はるゝほどの大東亞共榮國の確立といふ世界歴史の大轉換がこゝ十年以内に完成するのである。光明に滿々たる國難

であつて、元寇とは大に趣を異にしてゐるのである。これに奮起しないものは日本人ではない。しかしあくまでも自力に信頼すべし。地理的優位を頼み、或は神風を期待してはならない。劍聖宮本武蔵は「神佛を尊み神佛を頼まず」と語つたさうであるが、われらは飽くまで地理的優位はこれを尊重しこれを利用し、自然を以て己の味方とし、自然を無視するが如き横車的國策は綺麗さつぱりと清算し、煽動家の率ゆる衆愚をして所謂名將の戰略を妨害せしむるなからしめたいものである。紀元二千六百一年の元旦支那事變第五年を迎ふるにあたり感殊に深し矣」

と云ふてあるが、之等の説は、太平洋戰略の如何なる性質を帯びるものかを暗示するものである。我々は、海戦と云へば、日清戦役の黄海の海戦、日露戦争の日本海々戦、ネルソン時代のトラファルガル海戦の様な華々しい戦を想起するが、兩海軍が對立したからとて必ずしも華々しい決戦があるとは云へない。第一次歐洲大戰に於ける、二大海軍國英獨は、僅にジユトランド沖の海戦を残したのみで、大戰終了迄、潜航艇戦以外は對立のまゝである。故に、日米開戦となつても、濱田中將の言の如くに、長期的封鎖又はゲリラ、通商妨害の戦となるかも知れない。

只、日本海軍は西太平洋の守に於て、敵國に充分對立することを確信してよい。

六、世界的混亂

もし不幸にして、日米が歐洲戰亂に加入し、文字通り世界戦となれば、全く、歴史上空前の混亂した戦時となる。だが、その前に一寸一言して置きたいのは獨軍の英本土上陸戦である。この問題は、昨年の夏佛軍の撃破された直後から論議されてゐて、八月上陸説、九月説、本年に入つてからは一月、三月説とあるが、未だ實行されない。海軍の軍略的及び制海權問題から見ると、如何にドウバア海峡はせまくとも、英國が制海權を有する以上、上陸策戦は難しいとの事である。だが、獨逸にして戦局を勝利に導くには、英國を屈伏せしむる外ない。英國の屈伏には上陸戦に依らなければならぬ。これは一九四一年に課された一問題である。吾人は只こゝに詳論の邊なきを一言して置く、扱て、本文に戻つて、日米の參戦で、空前の世界的混亂となつたならば、一體世界はどうなるか？ 戦は如何に轉回するか？ 吾人は豫想するだに戦慄するのである。冒頭

に於ける松岡外相の談話にも、本年度の世界危機を語つて、深く危惧の念にかられてゐるが、こゝは、戦局と國際情勢とに思を走らすものゝ何人も同じうする所である。世界が、日獨伊對英米の對立長期戦となれば、その戦局に何年を要するかは何人も豫断することは出来ない。

ヨーロッパの歴史を見ると、ギリシア時代のアテネ、スパルタの二大國が三十餘年のヘロポネネサス戦争をやり、其他、中世紀の三十年戦争、七年戦争、近代の奈翁戦争の如き相當長期に亘つた。第一次大戦も五ヶ年かゝつた。今次大戦は、陸に、海に亘り殊に、大西洋、太平洋に迄戦波が及んだならば、世界の混亂は殆んど收拾することが困難になる。心を深くこゝに沈めると、世界の前途に對して轉た寒心せぬ譯けに行かない。吾人は、松岡外相と共に、この來るべき國際難局が、何等かの方策に依り、世界的混亂に波及することを防止したい。

だが、以上論述した如くに、米國が對英援助を強化し、參戰を辭せずとせば、戰禍の擴大は如何ともすることは出来ない。此點吾人は深憂に堪えない。

三選後のルーズベルト大統領は、自國のみならず、此の世界的危局に際して、國際平和と人類

の幸福の爲めに、更に三考四考あらんことを望む。だが「爐邊閑談」のル大統領は想をこゝにはせて、世界平和に貢献するかどうかは疑問とする所である。只、米國の動向が世界の危機に及す唯一無二の勢力であることを忘却せず、慎重なる態度をとりたい。

x x x x x x x

世界平和の工作に就ては、ギリシアの昔から最近のヴェルサイユ條約の國際聯盟迄種々に論議された。然し、二千年、三千年の歴史は過ぎたが、世界の平和は確立されない。第一次歐洲大戦の慘禍の生々しい二十年後の現在再び第二次大戦となり、更に空前の混亂に落入ることを懸念されてゐる。

世界平和の爲めには、各國の土地、資源の公平な分配を主張する人あるが、吾人は、世界新秩序と國際平和の爲め、更に一段の考究を爲すべきであるまい歟。……………(終)

東京情報會員募集

- 一、會員は一年参則を納付す、月二冊の本社パンフレットを送附す。
- 二、時事、人事、一般の質問に應ず、但し質問者は返付料送附のこと。
- 三、御申込は會則賛成の上入會の旨記入郵便爲替にて會費参則封入本社へ御申込み下されば新刊パンフレットを送附致します。多数の入會者を望む。

東京市淀橋區諏訪町一一一
東京情報社

編輯後記

二千六百一年は、國際的危機と云ふてよい。然れば松岡外相、ル大統領の談話も或は世界的に或は國內的に多大の波紋を起すのである。

もし米國にして参戦せば、日本も大戰に捲き込まれるものと見做なければならぬ。かくて全世界は空前の慘狀を呈する。吾人は此の危機の脱却を望むものであるが不敢取此の小冊子を送つて國際現狀を語る。……(一記者)

有所備版

米國の参戦と日米戰爭論

定價 十錢

(送料三錢)

昭和十六年二月一日 印刷
昭和十六年二月十日 發行

著者 山川直夫

發行人 東京市淀橋區諏訪町一一一番地
大沼廣喜

印刷所 東京市小石川區戸崎町九六番地
中橋印刷所

發行所 東京市淀橋區諏訪町一一一番地
東京情報社

啓 德社

厚生書院 新正堂(大阪)

【次取大】



